

阪神・淡路大震災後世代の震災記憶継承に関する 意識と態度

～属性による特徴とコロナ禍による意識変化
(2020年度調査2次分析)～

Attitudes and Awareness of Post-Disaster Generations Toward Passing on the Memories of the Great Hanshin-Awaji Earthquake:

Characteristic Attributes of Survey Respondents and Changes in Their Attitudes
and Awareness Caused by the Covid-19 Pandemic (2020 Survey Analysis)

山中 速人・照本 清峰・津田 睦美・奈良 雅美・金 千秋

Hayato Yamanaka, Kiyomine Terumoto, Mutsumi Tsuda, Masami Nara, Chiaki Kim

January 17, 2025, will mark 30 years since the Great Hanshin-Awaji Earthquake. Today, the areas affected by the earthquake are home to a growing number of new generations born after the disaster. In order to determine what attitudes and awareness these post-disaster generations have about passing on the memories of the earthquake, awareness surveys were conducted in 2019 and 2020. This paper is the outcome of a more detailed analysis of the data from the 2020 survey. The survey was carried out over a one-month period from June to July 2020, and targeted undergraduate students studying at universities located in the disaster-affected areas. There were 749 valid responses. Given that the survey was implemented in the midst of the Covid-19 pandemic, questions were added related to attitudes and awareness of the pandemic in order to secure information on how the pandemic affected attitudes and awareness concerning the Great Hanshin-Awaji Earthquake. This paper analyzes how the attributes of the respondents affected their attitudes and awareness toward passing on the memories of the Great East Japan Earthquake to future generations, and how those attitudes and awareness may have changed as a result of the pandemic. The main findings were that women were less hesitant than men to recall the painful memories of the earthquake and were more willing to preserve disaster ruins. Women were also more likely than men to be leery of Covid-19, and more accepting of the restrictions on leaving the house. In contrast, men were more likely to support the idea that priority should be given to passing on information and knowledge useful for disaster prevention. It was also found that respondents living in areas affected by the disaster were less concerned about being infected by Covid-19, more resistant to restrictions on leaving the house and patterns of behavior, and less responsive to pandemic information. Still, regardless of whether they were from or lived in a formerly disaster-affected area, respondents showed little qualitative difference in their attitudes and awareness toward passing on the memories of the Great East Japan Earthquake to future generations. Respondents who felt victimized by the pandemic showed a slight tendency to be hesitant about having earthquake victims speak actively about their personal experiences in the disaster. Respondents who strongly feared infection, and were willing to abide by the pandemic restrictions on going out, were found to be skeptical about the effectiveness of all of the methods proposed for passing on the memories of the earthquake disaster.

キーワード：災害記憶、兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)、集合的記憶、コロナ禍、意識調査

Key Words : Disaster Memory, The 1995 Southern Hyogo Earthquake, Collective Memory, COVID-19 Pandemic, Opinion Research

1. はじめに：本研究の背景、本論の問題設定と射程

2025年1月17日には、阪神・淡路大震災(以下:大震災)の発災後30年を迎える。今日、被災地に居住する人々の中で大震災後に誕生した世代は、着実に増加している。発災後30年に迫ろうとする今日、大震災の歴史的事実の収集と記録はもとより、たんに歴史的記録の保存に留まらず、人びとが大震災の記憶をいかに継承していくことができるかが、重要な社会的課題になりつつある。この大震災の記憶を次世代に継承していく上で重要な役割を担うのが、震災後に誕生した世代であることは、言を俟たない。彼ら/彼女らが、大震災の記憶継承についてどのような意識と態度をもって、何を明らかにすることは、この作業を進める上で、きわめて重要な課題であると思われる。このような問題意識に立って、本研究班は、2019年度と2020年の2度にわたって、被災地およびその周辺の複数の大学で学ぶ震災後世代を対象に、大震災の記憶継承にかかる意識調査を実施した。調査では、以下に示す5つの大きな項目がたてられた。

- (1) 大震災についての知識や情報を何から知ったか
 - (2) 大震災についてのどんな事象に関心があるか
 - (3) 大震災やその記憶継承についての認識や態度
 - (4) 大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思うか
 - (5) 大震災の経験や記憶を伝えるために、どんな手段が効果的だと思うか
- この調査に関する結果については、すでに2020

年度および2021年度発行の本研究誌において、単純集計を中心にその基礎的な部分に関する報告を行っている¹。

この2つの調査の中で、2020年度に行われた調査は、期せずして、コロナ禍によって社会が大きな変化に晒された時期の最中に実施されることになった。そこで、大震災の記憶継承に対して調査対象者が抱く意識や態度にコロナ禍がどのような影響を与えるかについても、問題関心の対象とし、コロナ禍に関連する質問項目群も加えて、調査を実施した。

調査対象は、本学部生と大震災の被災地に位置する大学(神戸常盤大学、兵庫県立大学)の学部生であり、有効回答は749票であった。調査方法は、Googleフォームを利用し、インターネット上のウェブサイト質問群を置き、被験者がそれに直接アクセスして回答するよう求める方法で行われた。調査期間は、2020年6月から7月にかけての1ヵ月であった。調査データは、Googleフォームの集計機能を使って単純集計を行うと同時に、マトリクス形式のローデータも併せて取得し、独自に分析を行った。調査実施主体は、関西学院大学総合政策学部共同研究班と阪神・淡路大震災の被災地、神戸市長田区のコミュニティ放送局である特定非営利活動法人エフエムわいわいである。

なお、この一連の研究プロジェクトは、同総合政策学部2019年度学部共同研究²、ならびに2020年度関西学院大学共同研究補助金対象研究³、さらに2020年度学術振興会科学研究費補助金対象研究⁴としての予算的裏付けを得て実施された。

さて、調査データの基礎的分析を進める中で、1つの注目すべき点が明らかになった。それは、

1 山中連人、照本清峰、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する震災後世代の意識と態度～調査報告(基礎編)～」『総合政策研究』第61号、pp.47-69、2020年9月20日。山中連人、照本清峰、津田睦美、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災後世代の震災記憶継承とコロナ禍に関する意識と態度：2020年度調査報告(基礎編)」『総合政策研究』第63号、pp.69-95、2021年9月30日

2 研究題目「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する大震災後世代の意識調査、および地元コミュニティ放送局との災害記憶継承番組の共同制作」

3 研究題目「阪神・淡路大震災の記憶継承にかかる震災後世代への意識調査と国際研究交流」

4 研究題目「災害後世代による災害記憶の継承にかかる地域メディアの役割に関する国際共同調査」

コロナ禍を経験する以前に行われた2019年調査の結果と、コロナ禍を経験した2020年調査の結果で、回答者である震災後世代の回答傾向に大きな変化が認められたことである。その最大の点は、継承すべき震災記憶の対象として、コロナ禍以前の2019年の回答者は、被災者や犠牲者個人の感情や思いについての記憶を継承することより、災害の客観的事実やデータについての記憶の継承により大きな関心を示していたのに対し、コロナ禍を経験した2020年の回答者は、災害の客観的事実やデータについての記憶より被災者や犠牲者個人の感情や思いについての記憶の継承に対して、より強い関心を示したことであった。

本論に先立つ基礎的分析にかかる報告書においては、この変化には、震災後世代がコロナ禍を経験し、被災者として自己意識を持ったことが関係しているかもしれないという仮説を提示するだけにとどめ、それを明らかにするためのより深い分析については、課題として残した。本論の射程は、この課題に答えを見出すことにある。

2. 2020年調査結果の基本的特徴

その作業に取り掛かるに先立って、基礎的分析で明らかになった主要なファインディングスをあらためて確認しておきたい。ここでは、2020年調査における基礎的分析結果の特徴を概観する⁵。

2-1. 調査対象者の特徴

- ・ 回答者の過半数は、大震災の5～6年後に生まれた世代であった。
- ・ 回答者の出生地は、被災地、被災地以外兵庫県下、兵庫県外の3分類で見ると、被災地で生まれた者は16%に過ぎず、他方、兵庫県外で生ま

れた者が64.5%であった。

- ・ 被災地での居住経験では、居住経験のない者が60.6%あり、被災地の大学に学ぶ学生の被災地離れの傾向が認められた。
- ・ 全体の半数強(56.6%)の回答者が周囲になんらかの被災者と接する環境にあり、震災後世代の被災地からのディアスポラ現象を示唆していた。
- ・ 回答者全体の傾向としては、被災地の大学で学ぶ学生とほいうものの、その中には、被災地での居住経験もなく、また、被災経験者を直接知らない学生もすくなくなかった。この傾向は今日の被災地の現実を物語っている。

2-2. 大震災についての知識や情報の入手経路

- ・ ほとんどの知識や情報について、情報源として最も高い比率を示したのは、1つは「学校教育」を通してであり、もう1つの情報源は、「ノンフィクション映像」であった。次に頻度の高かった情報源は、「家族・親類」であった。
- ・ 他方、大震災の記憶継承を目的として設立された博物館やモニュメント、また、各種の追悼行事や記念イベントが情報源である場合は、相対的に小さかった。

2-3. 語り継ぐべき大震災の記憶

- ・ 「将来の防災に役立つ教訓や知識など」、「避難所や仮設住宅での被災者の生活の実情や苦労など」や「震災直後の避難誘導、応急医療、水や食糧の配布などの支援活動」など、震災直後の避難や救助に関する記憶の継承に回答者の相対的に強い関心が示された。
- ・ 他方、「亡くなった人の個人の記録やエピソード」や「被災者個人の震災に対する見解や震災

5 基礎的分析の詳細な結果は、本誌63号掲載の前掲論文、山中速人、照本清峰、津田睦美、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災後世代の震災記憶継承とコロナ禍に関する意識と態度：2020年度調査報告（基礎編）」『総合政策研究』第63号、pp.69-95、2021年9月30日に報告されている。

後の生き方など」のような被災者の個人の経験やエピソードについては、相対的に語り継ぐ必要性は低いという回答者の態度が認められた。

- ・ 継承すべき震災の記憶の種類や内容によって、継承すべき重要度に差があることが示された。つまり、震災後世代による震災記憶の継承については「選択的継承」という傾向があった。

2-4.大震災やその記憶継承についての認識や態度

- ・ 大震災とその復興について、具体的な意見を刺激文として示し、刺激文ごとに共感の程度を尋ねると、9割以上の回答者が、被災地はすでに復興しているとの認識をもっていた。
- ・ 他方、9割を超える回答者が復興過程で生じた社会問題をオープンに公表することに積極的な認識を示した。
- ・ 同時に、復興が進んでいない地域について、そのままオープンに知らせてもイメージが悪化することはないとする認識をもつ回答者が、7割近い比率を示した。
- ・ 回答者たちの多数が、すでに被災地が復興を遂げたとの認識と並行して、多くの社会問題が解決されているという認識も高まり、復興過程における社会問題の存在や復興が進んでいない地域の存在を客観視する傾向も増大したものと考えられる。震災後世代は、ネガティブな情報の存在についても受容的な態度を示すようになってきたといえる。
- ・ しかし、「大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない」という刺激文に同意を示す回答者も、回答者の42.8%を占めた。ただし、大震災の犠牲者の生々しいエピソードを知ることに對する回答者の反応は、肯定、否定、態度保留に3分され、回答者の戸惑いを反映したものとなった。

2-5.大震災の記憶継承についての相対立する意見・態度に対する反応

- ・ 今回の調査では、大震災の記憶の継承に関する対立する2つの意見に対して、どちらの意見を選択するかを問う質問を用意した。とくに「大震災の記憶の継承について、被災者の感情や思いについての記憶の継承にこそ力を入れるべきか、それとも、データに基づく客観的な事実の継承にこそ力を入れるべきか」について、前回の調査では、「被災者の感情や思い」の継承に対する肯定的反応より「データに基づく客観的な事実」の継承に対する肯定的反応がわずかながら強く現れた。しかし、今回の調査では、「被災者の感情や思い」の継承にこそ力を入れるべきだという意見を支持した回答者は、60.1%に及び、「データに基づく客観的な事実」の継承にこそ力を入れるべきだという意見を支持した回答者(24.1%)の2倍以上となった。
- ・ つぎに、災害遺構の保存については、「辛い記憶を思い起こさせても遺構を残すことに賛成」した回答者は、60.4%で、「災害の爪痕は消して、新しい都市景観に作り変えることに賛成」した回答者31.9%のほぼ2倍あった。
- ・ 他方「防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ」という意見に賛成する回答者は、53.8%で、「防災に役立つかどうかにかかわらず、歴史的事実や被災者の記憶は伝えるべきだ」という意見に賛成する回答者32.8%より多数を示した。ただ、この質問についての回答者の反応は、いわゆる正規分布ではなく、賛成か反対かの2つの山に2分される傾向を示した。

2-6.記憶継承の効果的手段

- ・ 今回の調査では、「被災者からの直接的な語りかけ」による震災記憶の継承がもっとも効果的であるとされ、第2には「テレビ映像や記録映

画などのノンフィクション映像」が選ばれ、第3には「家族・親類などからの語り継ぎ」が選ばれた。

- 2019年の調査では、記憶継承の効果的手段として高い評価を得た「SNSやブログ、ウェブページなどのインターネット」は 今回の調査では、最も低い評価を得るにとどまった。
- 同様に、前年の調査では、最も多くの回答者が効果的な手段として選択した「学校教育をとおした記憶継承」の手段についても、必ずしも高い効果評価を得られなかった。

2-7. 新型コロナ・ウイルス感染症にかんする情報接触と意識・態度

- 新型コロナ・ウイルス感染症についての情報源は、「テレビ報道」が89.7%と最大で、これに「インターネットのニュースサイトや動画サイトなど」の73.6%が続いた。過半数を超える情報源は、この2つだけであった。
- これに対して、教育機関や医療・保健関係者を情報源として挙げた回答者は前者が20.2%、後者が9.6%で少数だった。
- 回答者たちは、新型コロナ・ウイルス感染が拡大する状況に対して、96.4%が「コロナ・ウイルスへの感染は絶対避けたい」と感じ、98.1%が「外出自粛の呼びかけに自分は従った」と答えた。震災後世代の大半は、行政による自粛要請に対して受動的に従ったのである。
- 他方、91.3%がコロナ禍のために「自分の生活スタイルが大きく変化した」と答え、46.8%が「感染防止のために『三密をさける』新しい生活様式には、とまどいがある」と答え、この状況に対する適応の困難さも示した。
- 76.5%が、コロナ禍を「阪神・淡路大震災と同様に甚大な災害である」と捉え、また、61.5%が「自分は、新型コロナ・ウイルス感染拡大という災害の被災者だ」と感じていた。そして、

87.2%が、コロナ禍の中の「自分自身の経験を次の世代に伝えること」に価値があると答えた。

- 震災後世代の回答者たちは、コロナ禍という新しい災害に直面しているという当事者意識をもち、被災者意識を持った者もすくなくなかった。そして、その体験を将来に伝えることに価値があるという認識を持ったのである。

3. 回答者の属性による大震災の記憶継承に関する意識・態度の特徴

以上、単純集計の結果を概観してきた。それでは、つぎに回答者の属性が大震災の記憶継承に対する意識・態度にどのような関係しているかをみてみたい。そのために、回答者の属性を条件として、質問群C、D、E、Fに対する反応について平均差の検定(*t*検定)を行った。表3-1、表3-2、表3-3は、その結果である。ここでは、有意差の水準を $p < 0.001$ および $0.001 < p < 0.05$ の2つを設定し、それぞれを墨の濃淡で表示した。

3-1. 大震災の記憶継承に関する意識・態度のジェンダーによる差異と特徴

ジェンダー(性別)によって、大震災およびその記憶継承に関する意識・態度にどのような差異が生じるのだろうか。表3-1は、その結果について有意な相関があった変数について記している。記憶継承に関する意識・態度に関するC、D、E、Fの質問群を構成する個々の変数について、女性と男性で回答傾向に有意差が生じた項目は、 $p < 0.001$ の水準で、D2、D3、D5、E2、E3、F8であった。

これを個々の変数についてみてみよう。

まず、女性は、D2「マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている」には男性より有意に「そう思う」と回答する傾向があった。

つぎに、女性は男性と比べて、D3「大震災で亡

表3-1. 性別×質問C・D・E・F

	t	df	p	Group	N	Mean	SD	SE
C9 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について	-2.21	747	0.027	女性	472	1.665	0.761	0.035
				男性	277	1.801	0.897	0.054
C10 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて	-2.157	747	0.031	女性	472	1.714	0.796	0.037
				男性	277	1.848	0.867	0.052
D2 マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	3.554	747	< .001	女性	472	2.466	1.076	0.05
				男性	277	2.173	1.109	0.067
D3 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい	4.149	747	< .001	女性	472	2.962	0.97	0.045
				男性	277	2.646	1.062	0.064
D5 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい	4.575	747	< .001	女性	472	3.924	0.893	0.041
				男性	277	3.581	1.135	0.068
D6 大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない	2.647	747	0.008	女性	472	3.347	1.091	0.05
				男性	277	3.126	1.124	0.068
D9 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある	-1.996	747	0.046	女性	472	1.443	0.717	0.033
				男性	277	1.552	0.738	0.044
E2 災害遺構について (A) 災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変える (B) 象徴的な被災建築物や遺物は辛い記憶を思い起こさせても残す	5.241	747	< .001	女性	472	3.398	1.084	0.05
				男性	277	2.931	1.321	0.079
E3 将来の防災への有用性について (A) 防災に役立つ情報や知識を優先して伝える (B) 防災にかかわらず事実や被災者の記憶は伝える	4.09	747	< .001	女性	472	2.807	1.319	0.061
				男性	277	2.401	1.303	0.078
E4 被災者や犠牲者のエピソードについて (A) 被災者の心情に配慮し犠牲者個人のエピソードを公表しない (B) 辛い記憶でも犠牲者の個人的なエピソードを伝える	3.123	747	0.002	女性	472	3.36	1.109	0.051
				男性	277	3.094	1.157	0.07
F2 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)からの語り継ぎ	-3.151	747	0.002	女性	472	1.439	0.645	0.03
				男性	277	1.617	0.9	0.054
F3 友人との会話や議論をとおして語り継ぐ	-2.497	747	0.013	女性	472	2.049	0.914	0.042
				男性	277	2.231	1.045	0.063
F4 学校の授業やホームルーム、行事をとおして教える	-2.57	747	0.01	女性	472	1.659	0.766	0.035
				男性	277	1.819	0.919	0.055
F5 ノンフィクション映像(テレビ報道、記録映画など)によって伝える	-3.028	747	0.003	女性	472	1.379	0.62	0.029
				男性	277	1.534	0.764	0.046
F7 創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える	-2.102	747	0.036	女性	472	1.826	0.903	0.042
				男性	277	1.975	0.983	0.059
F8 SNS、ブログ、ウェブページなどで伝える	-3.507	747	< .001	女性	472	2.14	1.025	0.047
				男性	277	2.422	1.129	0.068

□ 0.001<p<0.05 □ p<0.001

亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい」、D5「大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい」については、「そう思わない」とより強く否定する傾向を有意に示した。とくに、D3「大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませない

ために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい」については、男性が「そう思う」と答える傾向を示したのに対し、女性は「そう思わない」と回答する傾向を示した。

また、対立する2つの意見のどちらを支持するかを問う質問群Eについても、女性は男性と比べて、E2「災害遺構について、A災害の爪痕は消して、

新しい町並みや都市景観に作り変える⇔B象徴的な被災建築物や遺物は辛い記憶を思い起こさせても残す]では、B「象徴的な被災建築物や遺物は辛い記憶を思い起こさせても残す」方を有意に支持する傾向があった。この質問についても、男性は「A災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変える」を支持する傾向を示したのに対して、女性是对照的な反応を示したのである。

2者間に有意な差があるという場合には、たんに同じ傾向の強弱の程度において2者間に有意差がある場合と、2者が正反対の傾向を有意に示している場合がある。この質問E2については、女性と男性の間に、たんに前者の同じ意見を支持する程度の差があるのではなく、あきらかに後者の正反対の意見を支持する傾向があることが示された。図3-1は、ジェンダーを条件にE2についての平均差検定の結果をそれぞれの回答者の平均と分散を示したものである。これらを見れば分かるように、女性と男性の平均値は、AとBの意見が分岐する中点を挟んで対立的に布置している。

そして、E3「将来の防災への有用性について、A防災に役立つ情報や知識を優先して伝える⇔B防災に役立つかどうかにかかわらず事実や被災者の記憶は伝える」では、男性は女性と比べてB「将来の防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝える」を支持する傾向が有意に強かった。

この結果から読み取ることができることを簡潔に述べれば、女性は、男性にくらべて、大震災の犠牲者についての辛い記憶を想起することや復興が遅れている街の現実を直視することに躊躇せず、また、辛い大震災の記憶を想起させる災害遺構の保存にも積極的であるということができよう。

また、震災の記憶継承にとって効果的な手段として、女性は、男性よりF8「SNS、ブログ、ウェブページなどで伝える」を有意に挙げる傾向がみられた。

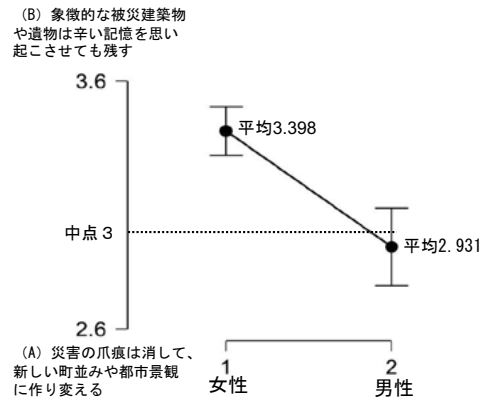


図3-1. E2 災害遺構について

3-2.大震災の記憶継承に関する意識・態度の被災地経験(出生地、現住地、居住経験)による差異と特徴

2019年度の調査でも試みたが、回答者の被災地での生活経験の有無が大震災およびその記憶継承に関する意識・態度にどのような差異が生じるのかを探ってみた。ここでは、フェイスシート部分の質問i3出生地、i4現住地、i5被災地居住経験の選択項目をカテゴリーコラプスし、被災地で生まれたかどうか、被災地に現住しているかどうか、被災地での居住経験の有無の3つの変数に作り変え、それらをそれぞれ条件として平均差検定をおこなった。

表3-2-1、表3-2-2、表3-2-3は、その結果について有意な相関があった変数について記したものである。これらの表を見れば分かるように、これら3つの属性変数については、若干の差異はあるが、大震災およびその記憶継承に関する意識・態度について、ほぼ似た反応を示した。

まず、質問群Cの語り継ぐべき大震災の記憶に関する項目については、おおむねすべての項目について、被災地出身/居住経験者は、被災地外の者より関心を示す程度が有意に低い傾向があった。もちろん、被災地出身/居住経験者も、

表3-2-1. 被災地居住経験×質問C・D・E・F

	t	df	p	Group	N	Mean	SD	SE
C1 震災直後の人命救助、消火、応急医療など救命救急活動について	-3.178	747	0.002	1居住経験なし	454	1.626	0.716	0.034
				2居住経験あり	295	1.807	0.829	0.048
C2 震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について	-2.937	747	0.003	1居住経験なし	454	1.54	0.711	0.033
				2居住経験あり	295	1.702	0.778	0.045
C3 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて	-2.33	747	0.02	1居住経験なし	454	1.546	0.704	0.033
				2居住経験あり	295	1.675	0.784	0.046
C4 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程などについて	-3.39	747	<.001	1居住経験なし	454	1.645	0.715	0.034
				2居住経験あり	295	1.837	0.817	0.048
C5 個人の住宅の被害状況や再建過程などについて	-3.75	747	<.001	1居住経験なし	454	1.753	0.803	0.038
				2居住経験あり	295	1.99	0.902	0.052
C6 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて	-2.319	747	0.021	1居住経験なし	454	1.361	0.603	0.028
				2居住経験あり	295	1.471	0.679	0.04
C7 亡くなった人の個人の記録やエピソードなどについて	-2.843	747	0.005	1居住経験なし	454	1.813	0.878	0.041
				2居住経験あり	295	2.01	1.002	0.058
C8 被災者個人の大地震に対する見解や震災後の生き方などについて	-3.871	747	<.001	1居住経験なし	454	1.667	0.823	0.039
				2居住経験あり	295	1.922	0.96	0.056
C9 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について	-3.03	747	0.003	1居住経験なし	454	1.643	0.775	0.036
				2居住経験あり	295	1.827	0.865	0.05
C10 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて	-3.815	747	<.001	1居住経験なし	454	1.672	0.766	0.036
				2居住経験あり	295	1.905	0.891	0.052
	t	df	p	Group	N	Mean	SD	SE
D4 大地震の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ	-2.067	747	0.039	1居住経験なし	454	1.78	0.789	0.037
				2居住経験あり	295	1.905	0.844	0.049
D7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ	-2.297	747	0.022	1居住経験なし	454	1.337	0.563	0.026
				2居住経験あり	295	1.441	0.662	0.039
D10 大地震の被災地にある大学とメディアは、大地震の記憶継承や防災知識・情報の普及について協力すべきだ	-3.945	747	<.001	1居住経験なし	454	1.456	0.662	0.031
				2居住経験あり	295	1.658	0.715	0.042
	t	df	p	Group	N	Mean	SD	SE
F7 創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える	-3.878	747	<.001	1居住経験なし	454	1.775	0.883	0.041
				2居住経験あり	295	2.044	0.99	0.058

□ 0.001<p<0.05

□ p<0.001

被災地外の者も、ともにこれらすべての項目について、語り継ぐ必要があると回答する傾向を示しているが、両者を比較すると、被災地外の者の方が、被災地出身/居住経験者より有意に強く必要だと回答している。

このような傾向は、他の変数との関係においても認められ、被災地出身/居住経験者と被災地外の者の回答傾向に有意差が認められた項目の多くは、回答者全体の傾向と基本的に同じで、その反応の強さの程度に有意な差が示されたのである。たとえば、D10「大地震の被災地にある大学とメ

ディアは、大地震の記憶継承や防災知識・情報の普及について協力すべきだ」や記憶継承のための効果的な手段としてF7「創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える」に対して、被災地出身/居住経験者は、「そう思う」と答える傾向を示したが、その程度は、被災地外の者より有意に弱かったのである。

これらの結果からおおよそ読み取れることは、被災地での出生や居住経験の有無は、全体の回答傾向に程度の差を生じさせることはあるが、ほとんどその反応に質的な差はないということであ

表3-2-2. 被災地出身×質問C・D・E・F

	<i>t</i>	df	<i>p</i>	Group	N	Mean	SD	SE
C1 震災直後の人命救助、消火、応急医療など救命救急活動について	3.488	747	<.001	1被災地出身	144	1.896	0.825	0.069
				2被災地外出身	605	1.65	0.746	0.03
C2 震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について	4.055	747	<.001	1被災地出身	144	1.826	0.839	0.07
				2被災地外出身	605	1.55	0.707	0.029
C3 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて	2.909	747	0.004	1被災地出身	144	1.757	0.871	0.073
				2被災地外出身	605	1.559	0.699	0.028
C4 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程などについて	3.827	747	<.001	1被災地出身	144	1.938	0.838	0.07
				2被災地外出身	605	1.669	0.735	0.03
C5 個人の住宅の被害状況や再建過程などについて	3.974	747	<.001	1被災地出身	144	2.097	0.97	0.081
				2被災地外出身	605	1.787	0.809	0.033
C6 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて	3.638	747	<.001	1被災地出身	144	1.576	0.807	0.067
				2被災地外出身	605	1.364	0.581	0.024
C7 亡くなった人の個人の記録やエピソードなどについて	2.873	747	0.004	1被災地出身	144	2.09	1.03	0.086
				2被災地外出身	605	1.843	0.903	0.037
C8 被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方などについて	4.165	747	<.001	1被災地出身	144	2.042	1.03	0.086
				2被災地外出身	605	1.702	0.838	0.034
C9 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について	3.31	747	<.001	1被災地出身	144	1.917	0.897	0.075
				2被災地外出身	605	1.668	0.789	0.032
C10 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて	3.629	747	<.001	1被災地出身	144	1.986	0.908	0.076
				2被災地外出身	605	1.711	0.796	0.032
	<i>t</i>	df	<i>p</i>	Group	N	Mean	SD	SE
D2 マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	-2.163	747	0.031	1被災地出身	144	2.181	0.944	0.079
				2被災地外出身	605	2.4	1.127	0.046
D3 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい	2.04	747	0.042	1被災地出身	144	3	0.931	0.078
				2被災地外出身	605	2.808	1.032	0.042
D7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ	2.087	747	0.037	1被災地出身	144	1.472	0.689	0.057
				2被災地外出身	605	1.355	0.582	0.024
D9 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある	4.18	747	<.001	1被災地出身	144	1.708	0.907	0.076
				2被災地外出身	605	1.43	0.666	0.027
D10 大震災の被災地にある大学とメディアは、大震災の記憶継承や防災知識・情報の普及について協力すべきだ	4.198	747	<.001	1被災地出身	144	1.75	0.762	0.063
				2被災地外出身	605	1.484	0.663	0.027
	<i>t</i>	df	<i>p</i>	Group	N	Mean	SD	SE
F7 創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える	3.608	747	<.001	1被災地出身	144	2.132	1.033	0.086
				2被災地外出身	605	1.821	0.901	0.037
F8 SNS、ブログ、ウェブページなどで伝える	3.912	747	<.001	1被災地出身	144	2.556	0.995	0.083
				2被災地外出身	605	2.17	1.078	0.044
F9 博物館や記念館の展示によって伝える	3.834	747	<.001	1被災地出身	144	2.097	1.111	0.093
				2被災地外出身	605	1.759	0.911	0.037
F11 行政、地域団体、宗教施設などの記念行事によって伝える	2.985	747	0.003	1被災地出身	144	2.479	1.159	0.097
				2被災地外出身	605	2.187	1.031	0.042

□ 0.001<*p*<0.05 □ *p*<0.001

ろう。ここから推論できることを端的に言えば、阪神・淡路大震災の発災後、四半世紀が経った時点で、大震災の記憶継承に対する意識や態度について、被災地出身であるかないかによる明確な差は、消滅しつつあるのかもしれない。

3-3. その他の属性による差異と特徴

今回の調査で、フェースシート部分に加えた2つの変数、i6「身近に被災者がいるか」、i7「東日本大震災の揺れを経験したか」をそれぞれ条件として、変数群C、D、E、Fに含まれる諸変数について

表3-2-3. 被災地現住×質問C・D・E・F

	t	df	p	Group	N	Mean	SD	SE
C1 震災直後の人命救助、消火、応急医療など救命救急活動について	2.655	747	0.008	1被災地現住	280	1.793	0.785	0.047
				2被災地外現住	469	1.64	0.751	0.035
C2 震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について	3.701	747	< .001	1被災地現住	280	1.732	0.778	0.046
				2被災地外現住	469	1.527	0.708	0.033
C3 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて	2.762	747	0.006	1被災地現住	280	1.693	0.793	0.047
				2被災地外現住	469	1.539	0.699	0.032
C4 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程などについて	3.304	747	< .001	1被災地現住	280	1.839	0.798	0.048
				2被災地外現住	469	1.65	0.732	0.034
C5 個人の住宅の被害状況や再建過程などについて	4.218	747	< .001	1被災地現住	280	2.014	0.9	0.054
				2被災地外現住	469	1.746	0.804	0.037
C6 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて	3.315	747	< .001	1被災地現住	280	1.504	0.708	0.042
				2被災地外現住	469	1.345	0.581	0.027
C7 亡くなった人の個人の記録やエピソードなどについて	2.654	747	0.008	1被災地現住	280	2.007	0.991	0.059
				2被災地外現住	469	1.821	0.89	0.041
C8 被災者個人の大地震に対する見解や震災後の生き方などについて	4.131	747	< .001	1被災地現住	280	1.939	0.962	0.057
				2被災地外現住	469	1.665	0.825	0.038
C9 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について	3.035	747	0.002	1被災地現住	280	1.832	0.832	0.05
				2被災地外現住	469	1.646	0.8	0.037
C10 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて	3.333	747	< .001	1被災地現住	280	1.893	0.865	0.052
				2被災地外現住	469	1.687	0.791	0.037
D7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ	2.53	747	0.012	1被災地現住	280	1.45	0.648	0.039
				2被災地外現住	469	1.335	0.574	0.027
D9 震災を知らない世代でも、大地震の記憶や経験を将来に伝える責任がある	2.363	747	0.018	1被災地現住	280	1.564	0.769	0.046
				2被災地外現住	469	1.435	0.697	0.032
D10 大地震の被災地にある大学とメディアは、大地震の記憶継承や防災知識・情報の普及について協力すべきだ	4.442	747	< .001	1被災地現住	280	1.679	0.701	0.042
				2被災地外現住	469	1.45	0.67	0.031
E2 災害遺構について (A)災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変える (B)象徴的な被災建築物や遺物は辛い記憶を思い起こさせても残す	2.074	747	0.038	1被災地現住	280	3.343	1.141	0.068
				2被災地外現住	469	3.156	1.226	0.057
F7 創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える	3.935	747	< .001	1被災地現住	280	2.054	0.977	0.058
				2被災地外現住	469	1.778	0.895	0.041

□ 0.001<p<0.05 □ p<0.001

て平均差検定を行った。ただ、i6に関しては、カテゴリーコラプスを行い、選択肢の中で、①「家族が被災した」、②「親類が被災した」、③「知人や友人が被災した」の3つをまとめて1つのカテゴリーに統合し、「身近に被災者がいる」として分析を行った。

表3-3-1、表3-3-2は、その結果について有意な相関があった変数について記したものである。結

果に関しては、ともに、 $p<0.001$ の水準では有意な差が認められなかったが、 $0.001<p<0.05$ の水準で、有意差を認めることができた。

まず、身近に被災者がいる者といない者との間で、C2、C3、C6、D5、E3、F7、F8の変数について、有意な差があった。つまり、身近に被災者をもつ回答者は、いない者と比べて、C2「震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について」、C3「避

表3-3-1. 被災者を知る×質問C・D・E・F

	<i>t</i>	df	<i>p</i>	Group	N	Mean	SD	SE
C2 震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について	-2.482	747	0.013	1身近に被災者を知る	424	1.545	0.72	0.035
				2被災者を知らない	325	1.68	0.763	0.042
C3 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて	-2.105	747	0.036	1身近に被災者を知る	424	1.547	0.7	0.034
				2被災者を知らない	325	1.662	0.783	0.043
C6 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて	-2.622	747	0.009	1身近に被災者を知る	424	1.351	0.581	0.028
				2被災者を知らない	325	1.474	0.696	0.039
	<i>t</i>	df	<i>p</i>	Group	N	Mean	SD	SE
D5 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい	2.29	747	0.022	1身近に被災者を知る	424	3.87	0.955	0.046
				2被災者を知らない	325	3.702	1.054	0.058
	<i>t</i>	df	<i>p</i>	Group	N	Mean	SD	SE
E3 将来の防災への有用性について (A)防災に役立つ情報や知識を優先して伝える (B)防災にかかわりなく事実や被災者の記憶は伝える	1.976	747	0.049	1身近に被災者を知る	424	2.741	1.336	0.065
				2被災者を知らない	325	2.548	1.308	0.073
	<i>t</i>	df	<i>p</i>	Group	N	Mean	SD	SE
F2 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)からの語り継ぎ	-2.056	747	0.04	1身近に被災者を知る	424	1.455	0.752	0.037
				2被災者を知らない	325	1.569	0.753	0.042
F7 創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える	2.164	747	0.031	1身近に被災者を知る	424	1.946	0.975	0.047
				2被災者を知らない	325	1.797	0.876	0.049
F8 SNS、ブログ、ウェブページなどで伝える	2.095	747	0.037	1身近に被災者を知る	424	2.316	1.098	0.053
				2被災者を知らない	325	2.151	1.033	0.057

□ 0.001<*p*<0.05 □ *p*<0.001

難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて」およびC6「将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて」の記憶を語り継ぐべきだと考える傾向があった。

つぎに、身近に被災者がいる者は、いない者と比べて、大震災やその記憶継承についての意識・態度については、D5「大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい」という意見に対して「そう思わない」と答える傾向が認められた。

また、対立する2つの意見のどちらを支持するかを尋ねた質問群Eでは、E3「将来の防災への有用性について(A)防災に役立つ情報や知識を優先して伝える⇔(B)防災に役立つかどうかにかかわりなく事実や被災者の記憶は伝える」について、身近に被災者がいない回答者は、いる回答者にくらべて、より強く(B)「防災に役立つかどうかにか

かわりなく事実や被災者の記憶は伝える」の意見を支持する傾向がみられた。

そして、記憶継承にとって効果的な手段を問う質問群Fでは、身近に被災者がいない者の方が、いる者にくらべて、F7「創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える」、F8「SNS、ブログ、ウェブページなどで伝える」を効果的だと考える傾向を示した。

つぎに、i7「東日本大震災の揺れを経験したか」について経験した者としなかった者との間で、C2、C3、C4、C5、F3、F6、F9の変数について、有意な差がみとめられた。

つまり、質問群C「大震災についてどんな記憶の継承が必要か」について、C2「震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について」、C3「避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて」、C4「道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程

表3-3-2. 東日本大震災経験×質問C・D・E・F

	t	df	p	Group	N	Mean	SD	SE
C2 震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について	-2.493	747	0.013	1揺れを経験した	255	1.51	0.687	0.043
				2経験していない	494	1.652	0.764	0.034
C3 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて	-2.217	747	0.027	1揺れを経験した	255	1.514	0.72	0.045
				2経験していない	494	1.64	0.745	0.034
C4 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程などについて	-2.42	747	0.016	1揺れを経験した	255	1.627	0.757	0.047
				2経験していない	494	1.769	0.761	0.034
C5 個人の住宅の被害状況や再建過程などについて	-2.625	747	0.009	1揺れを経験した	255	1.733	0.773	0.048
				2経験していない	494	1.905	0.883	0.04

	t	df	p	Group	N	Mean	SD	SE
F3 友人との会話や議論をとおして語り継ぐ	-2.851	747	0.004	1揺れを経験した	255	1.976	0.909	0.057
				2経験していない	494	2.188	0.99	0.045
F6 ノンフィクション出版物(新聞・雑誌記事、本、写真集など)で伝える	-2.329	747	0.02	1揺れを経験した	255	1.616	0.711	0.045
				2経験していない	494	1.757	0.824	0.037
F9 博物館や記念館の展示によって伝える	2.654	747	0.008	1揺れを経験した	255	1.953	1.071	0.067
				2経験していない	494	1.757	0.893	0.04

□ 0.001<p<0.05

■ p<0.001

などについて」、C5「個人の住宅の被害状況や再建過程などについて」のそれぞれについて、東日本大震災の揺れを経験した者は、しなかった者より、「記憶を継承する必要がある」と答える傾向がみられた。また、大震災の記憶継承に効果的な手段として、東日本大震災の揺れを経験した者は、しなかった者より、F3「友人との会話や議論をとおして語り継ぐ」、F6「ノンフィクション出版物(新聞・雑誌記事、本、写真集など)で伝える」、F9「博物館や記念館の展示によって伝える」方法を効果的だと回答する傾向が強かった。

しかし、大震災やその記憶継承にかんする意識・態度に関係する変数群DやEに含まれる諸変数とは、有意な差は認められなかった。

4. コロナ禍の経験と震災記憶の継承に関する意識・態度

それでは、回答者のコロナ禍の経験が阪神・淡路大震災の記憶継承に関する意識や態度にどのような影響を及ぼしているかについて、データを詳細に分析していくことにしたい。

4-1. コロナ禍に対する意識・態度

分析の最初に、回答者たちがコロナ禍について示した意識や態度の形成には、どのような要因が関わっているかを探っておきたい。調査では、コロナ禍に関する意識・態度に関して、12の変数が用意された。これらの変数全体に対して因子分析を行うことによって、震災後世代の回答者たちのコロナ禍に対する意識・態度に関与する因子がおよそ明らかにできるはずである。因子分析にあたっては、因子数の抽出は、主因子法、バリマックス回転を使用し、因子数は寄与率が累積で60%までとし、5因子を抽出した。表4-1は5因子それぞれの12変数に対する因子負荷量を示したものである。これら抽出された因子それぞれの因子負荷量を参考に、因子の解釈を行った。

第1因子は、変数H11「新型コロナ・ウイルスの感染拡大の下で生活する自分自身の経験を次の世代に伝えることは価値がある」とH12「新型コロナ・ウイルス問題については、身の回りだけでなく、国内、海外の情報や知識など広く関心がある」について強い正の相関がみられると同時に、変数H9「感染防止のための、オンライン授業や遠

隔会議、テレワークなどの導入は積極的に進めるべきだ」とH3「新型コロナ・ウイルスの感染拡大によって自分の生活スタイルが大きく変化した」についても弱い相関がみられた。よって、この第1因子は、マイナス側でコロナ禍に関する情報への関心が高く、また、それを次世代に伝えることへの関心も高い。同時に、オンライン教育や遠隔会議など情報ツール活用への関心も高い。コロナ禍を能動的に受け止める傾向が高い、いわば「**積極的情報行動因子**」と考えられる。

第2因子は、変数H7「感染防止のために「三密をさける」新しい生活様式を身につけることには、とまどいがある」、H3「新型コロナ・ウイルスの感染拡大によって自分の生活スタイルが大きく変化した」、H1「自分は、新型コロナ・ウイルス感染拡大という災害の被災者だ」、H10「現在、受講しているオンライン授業で学習を続けることには、苦痛や疲労を感じる」、H4「新型コロナ・ウイルスの感染拡大によって、経済的にきびしくなった」と弱い相関が認められた。これら変数は、共通してコロナ禍による生活面や心理面の困難さや被災感情にかかわる変数である。よって第2因子は、マイナス側で、回答者たちの被災感情と強く結びつく傾向を示し、また、コロナ禍による心理的不適応感や経済的困難感を示している。したがって、この第2因子を、いわば「**被災・被害者意識因子**」と考えることができよう。

第3因子は、とくに変数H8「新型コロナ・ウイルスの感染拡大を防止するための外出自粛に従うかどうかは、個人の自由だから必ずしも従う必要はない」と強い負の相関をもち、また、逆に、変数H2「新型コロナ・ウイルスの感染は絶対に避けたい」、H5「新型コロナ・ウイルスの感染拡大を防止するための「外出自粛」の呼びかけに、自分は従った」と正の相関を示した。これらは、コロナ

感染に対する強い忌避感や行政の自粛要請に対する服従／反発に関わる変数である。よって、第3因子は、マイナス側で感染への忌避感と自粛要請への受容傾向を示しており、いわば「**感染忌避・自粛受容因子**」と考えられる。

第4因子は、変数H9「感染防止のための、オンライン授業や遠隔会議、テレワークなどの導入は積極的に進めるべきだ」と強い相関を示し、逆に、変数H10「現在、受講しているオンライン授業で学習を続けることには、苦痛や疲労を感じる」と負の相関を示した。これらの変数は、コロナ禍がもたらしたデジタル情報活用への親和感／忌避感に関わる変数であり、よって、第4因子は、マイナス側で、「**デジタルツール親和因子**」と考えることができる。

第5因子は、変数H6「新型コロナ・ウイルスの感染拡大は、阪神・淡路大震災と同様に甚大な災害である」とやや強い相関を示し、また、同様に変数H1「自分は、新型コロナ・ウイルス感染拡大という災害の被災者だ」とも弱い相関を示した。これら2つの変数は、ともにコロナ禍を災害として自覚するかどうかに関わる変数であり、よって、第5因子は、「**コロナ災害自覚因子**」と考えたい。

この因子分析において、第1因子に**積極的情報行動因子**(寄与率19.3%)、そして第2因子に**被災・被害者意識因子**(寄与率13.8%)が析出されたことは、興味深い。この調査が行われたのは、2020年であり、新型コロナウィルスの感染拡大の第1波⁶の終わりの時期に当たっていた。コロナ禍について、毎日、メディアを通じて多くの情報が流れていたが、しかし、実際に回答者が自分の生活の周辺で感染者を見聞きすることは少なかった。回答者たちは、この新しい感染症に関する情報の収集や交換に関心を持ったと思われる

6 大阪府感染情報センターによれば、大阪府では2020年1月29日から6月13日を「第1波」、6月14日から10月9日を「第2波」としている。
<http://www.iph.pref.osaka.jp/infection/disease/corona.html>

表4-1.

H 新型コロナ肺炎ウイルスによる感染症が世界的に拡大し、各国の社会は危機的状況に陥っている中で生活するあなたの考え方や気持ち（一思う↔+思わない）

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
H11 新型コロナ・ウイルスの感染拡大の下で生活する自分自身の経験を次の世代に伝えることは価値がある。	0.6414	0.0769	-0.1332	-0.0014	0.1465
H12 新型コロナ・ウイルス問題については、身の回りだけでなく、国内、海外の情報や知識など広く関心がある。	0.5751	0.1464	-0.0749	0.1771	0.1221
H8 新型コロナ・ウイルスの感染拡大を防止するための「外出自粛」に従うかどうかは、個人の自由だから必ずしも従う必要はない。	-0.0631	0.0944	0.6820	-0.0052	0.0507
H9 感染防止のための、オンライン授業や遠隔会議、テレワークなどの導入は積極的に進めるべきだ。	0.2177	0.0458	-0.1327	0.6824	-0.0650
H6 新型コロナ・ウイルスの感染拡大は、阪神・淡路大震災と同様に甚大な災害である。	0.1755	0.0826	-0.1197	-0.0203	0.5681
H1 自分は、新型コロナ・ウイルス感染拡大という災害の被災者だ。	0.1171	0.3791	0.0138	-0.0766	0.2994
H2 新型コロナ・ウイルスの感染は絶対に避けたい。	0.1295	0.0524	-0.4133	0.0689	0.2483
H3 新型コロナ・ウイルスの感染拡大によって自分の生活スタイルが大きく変化した。	0.2067	0.4341	-0.1356	0.0451	0.1474
H4 新型コロナ・ウイルスの感染拡大によって、経済的にきびしくなった。	-0.0283	0.3321	-0.0366	0.0386	0.0593
H5 新型コロナ・ウイルスの感染拡大を防止するための「外出自粛」の呼びかけに、自分は従った。	0.0935	0.1359	-0.3112	0.2245	0.1448
H7 感染防止のために「三密をさける」新しい生活様式を身につけることには、とまどいがある。	0.1381	0.4684	0.1996	-0.0920	-0.1107
H10 現在、受講しているオンライン授業で学習を続けることには、苦痛や疲労を感じる。	0.1033	0.3568	-0.0163	-0.4007	-0.0069

■ >0.5 □ >0.3

が、他方、コロナ禍による生活への変化の経験や適応/不適応などの変容が強く表出されるのは、もうすこし時間が経過してからのように思われる。このような調査時期の微妙なタイミングが、この第1因子と第2因子の関係に表現されているように思われる。

4-2. 回答者の属性とコロナ禍に対する意識・態度との関係

つぎに、これら因子分析で抽出された5つの因子が、阪神・淡路大震災の記憶継承にかかわる意識・態度に関連する因子群とどのように関係するかを探ってみたい。

表4-2は、性別を条件として、個々の回答者もつこれら5因子の因子得点に対して、与えられた条件について異なった属性をもつ2つの回答者群のそれぞれの平均値間で有意差を検証するt検定を行った結果である。結果をみれば、第3因子

固有値

因子No.	固有値	寄与率	累積
1	2.32	19.34%	19.34%
2	1.66	13.84%	33.18%
3	1.17	9.74%	42.92%
4	1.05	8.72%	51.64%
5	0.95	7.95%	59.59%
6	0.85	7.12%	66.70%
7	0.78	6.47%	73.18%
8	0.74	6.20%	79.38%
9	0.69	5.73%	85.11%
10	0.64	5.33%	90.45%
11	0.60	4.99%	95.44%
12	0.55	4.56%	100.00%

について、有意差があることがわかった。(t(747)=6.531, p<.001)つまり、女性は男性より有意に感染忌避の感情が強く、自粛に従う傾向が強かったといえる。それ以外の因子については、とくに性別による有意な差は見られなかった。

表4-3は、回答者が阪神・淡路大震災の被災地に居住した経験に関して、居住経験のある者と

まったくない者に回答全体を2分し、被災地での居住経験を条件として、これら5つの因子に対して、同様にt検定を行った結果である。結果をみれば、第3因子について、有意差があることがわかった。 $(t(747)=4.221, p<.001)$ また、第1因子については、有意傾向があることがわかった。 $(t(747)=-3.204, p=.001)$ つまり、被災地に居住した経験のある者は、ない者より感染忌避の感情が弱く、自粛に拒否的な傾向が有意に強かった。また、コロナ禍に関する情報やそれを次世代に伝えることへの関心も高く、同時に、オンライン教育や遠隔会議など情報ツール活用への関心も高い傾向があったといえる。

回答者の出生地に関しても同様の傾向が認められた。表4-4は、回答者の出生地が阪神・淡路大震災の被災地であるか、ないかで回答者全体を2分し、それを条件として、これら5つの因子に対して、同様にt検定を行った結果である。結果をみれば、第1因子について、有意差がある $(t(747)=4.168, p<.001)$ ことがわかった。また、第3因子については、有意傾向がある $(t(747)=-3.204, p=.001)$ ことがわかった。つまり、被災地で生まれた回答者は、被災地外に生まれた者よりコロナ感染に対する忌避感情が弱く、自粛に対して拒否的である傾向が強かった。また、コロナ禍に関する情報やそれを次世代に伝えることへの関心が低く、また、オンライン教育や遠隔会議など情報ツール活用への関心も低い傾向を示した。

表4-5は、回答者の現在の居住地に関して、回答者の現住地が阪神・淡路大震災の被災地内であるか、被災地外であるかを条件として、これら5つの因子に対して、同様にt検定を行った結果である。これについても、出生地と同様の結果がみられた。結果では、居住経験、出生地の結果とよく似て、第1因子と第3因子について、ともに有意差がある(第1因子: $t(747)=4.277, p<.001$)、第3因子: $t(747)=-3.432, p<.001$)こ

とがわかった。つまり、被災地に居住する回答者は、被災外に居住する者より、コロナ感染に対する忌避感情が弱く、自粛に対して拒否的である傾向が強かった。また、コロナ禍に関する情報やそれを次世代に伝えることへの関心が低く、また、オンライン教育や遠隔会議など情報ツール活用への関心も低い傾向を示した。

表4-6は、回答者が東日本大震災の揺れを実際に経験したかどうかを条件として、これら5つの因子に対して、同様にt検定を行った結果である。結果をみれば、第2因子について、有意な差がある $(t(747)=-3.616, p<.001)$ ことがわかった。つまり、東日本大震災の揺れを経験した回答者は、より強く被災感情を示す傾向があり、また、コロナ禍による心理的不適応感や経済的困難感も示す傾向が強かったといえる。

また、家族・親戚・知人に阪神・淡路大震災の被災者がいるか否かを条件に、これら5つの因子について同様のt検定を行ったが、5つの因子のどれに関しても、有意な差をしめすことはなかった。

以上の分析から得られた知見をまとめると、次のようになるだろう。

まず、男性より女性の方に、コロナ感染に対する忌避感情が強く、自粛に対して受容的である傾向が強かった。一方、阪神・淡路大震災の被災地が出生地であったり、被災地での居住経験があったり、また、現住地が被災地であったりする回答者は、そうでない回答者より、コロナ感染に対する忌避感情が弱く、また、自粛に対する抵抗感が強い傾向を示し、また、コロナ禍に関する情報に積極的な反応や行動をとる傾向も弱かった。ようするに、被災地出身者や居住経験者であるからといって、コロナ禍に対して強い警戒感や情報行動をとるわけではなく、むしろ被災地外の回答者にその傾向が強くと認められた。これに対し、コロナ禍に対して被災感情を示し、また、心理的不適応

表4-2. t検定結果 性別×H因子群

	t	df	p
H因子1	0.697	747	0.486
H因子2	1.265	747	0.206
H因子3	6.531	747	< .001 **
H因子4	0.901	747	0.368
H因子5	2.048	747	0.041

** : $p < 0.001$ * : $0.001 < p < 0.05$

表4-3. t検定結果 被災地居住経験×H因子群

	t	df	p
H因子1	-3.204	747	0.001 *
H因子2	-0.2	747	0.842
H因子3	4.221	747	< .001 **
H因子4	-0.52	747	0.603
H因子5	-2.011	747	0.045

** : $p < 0.001$ * : $0.001 < p < 0.05$

表4-4. t検定結果 出生地×H因子群

	t	df	p
H因子1	4.168	747	< .001 **
H因子2	1.464	747	0.144
H因子3	-3.202	747	0.001 *
H因子4	0.613	747	0.54
H因子5	2.997	747	0.003

** : $p < 0.001$ * : $0.001 < p < 0.05$

表4-5. t検定結果 居住地×H因子群

	t	df	p
H因子1	4.277	747	< .001 **
H因子2	0.305	747	0.76
H因子3	-3.432	747	< .001 **
H因子4	1.174	747	0.241
H因子5	1.811	747	0.071

** : $p < 0.001$ * : $0.001 < p < 0.05$

表4-6. t検定結果 東日本大震災の経験×H因子群

	t	df	p
H因子1	-1.228	747	0.22
H因子2	-3.616	747	< .001 **
H因子3	-0.799	747	0.424
H因子4	-1.478	747	0.14
H因子5	0.609	747	0.543

** : $p < 0.001$ * : $0.001 < p < 0.05$

感や経済的困難感も示す傾向は、東日本大震災の揺れを経験した回答者により強く現れたのである。

阪神・淡路大震災の被災地の出身や居住経験の有無が、コロナ禍への強い情報関心・行動、感情反応などを促すだろうという観念は、すくなくとも、大震災を経験していない震災後世代に関しては、当てはまらないことがこの結果からいえるだろう。むしろ、東日本大震災のような実際の地震体験やジェンダーによる差異の方が、コロナ禍に対する情報関心・行動や感情反応に深く関わっているということを伺うことができたのである。

4-3.被災者感情と震災記憶継承意識・態度との関係

ところで、先のコロナ禍に対する意識・態度についての因子分析で析出された5つの因子の中で、1つの因子にここで注目したい。それは、コロナ禍による被災者意識にかかわる第2因子、**被災・被害者意識因子**である。すでに述べたように、第2因子は、変数H7「感染防止のために三密をさける新しい生活様式を身につけることには、とまどいがある」、H3「新型コロナ・ウイルスの感染拡大によって自分の生活スタイルが大きく変化した」、H1「自分は、新型コロナ・ウイルス感染拡大という災害の被災者だ」、H10「現在、受講しているオンライン授業で学習を続けることには、苦痛や疲労を感じる」、H4「新型コロナ・ウイルスの感染拡大によって、経済的にきびしくなった」と弱い相関が認められた。これら変数は、共通してコロナ禍による生活面や心理面の難しさや被災感情にかかわる変数である。つまり、第2因子は、マイナス側で、回答者たちの被災感情と強く結びつく傾向を示し、また、コロナ禍による心理的不適応感や経済的困難感を示している。

なぜ、この**被災・被害者意識因子**について、取り上げるかといえば、それは、この因子が、コロ

ナ禍に対する回答者がもつ違和感やとまどいなどの感情的反応、あるいは経済的困難やライフスタイルや学習スタイルの変容などの社会的影響によく結びついているからである。この因子が大震災の記憶継承にかんする意識・態度とどのように関連するかを丁寧にみることをとおして、コロナ禍が震災後世代の意識変化に及ぼした影響について、考察してみたい。ここでは、分析のレベルを変え、因子と諸変数間のより微細な関係をみることにする。

表4-7は、この第2因子、**被災・被害者意識因子**とC、D、E、Fの変数群との間で相関分析を行った結果である。結果をみれば分かるように、相関関係としての有意差は認められるものの、弱い相関関係しか認められなかった。

1つは、被災・被害者意識を強くもつ傾向にある回答者は、Cの「阪神・淡路大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思うか」という質問については、C5の「住宅状況やその再建過程について」記憶を継承することに関心をもつ傾向を示した。つぎに、記憶の継承については、D5「大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい」という意見に首肯する傾向が認められた。また、対立する2つの態度についての質問では、E4「被災者や犠牲者のエピソードにかんしては、被災者の心情に配慮し犠牲者の個人的エピソードについては公表しない方がよい」という態度を示す傾向がみられた。そして、大震災の記憶を伝える手段としては、F7「ドラマや劇映画などの創作作品による記憶の継承が効果的であると思う」傾向を示したのである。

これらの傾向から推測すると、コロナ禍によって被災・被害者意識を持つ傾向を示した震災後世代の回答者たちは、非常に緩やかではあるが、大震災で被害を被った地域や人びとについて、その被害や被害者としての心情について公然と語るこ

とに躊躇する傾向を示したといえるだろう。

つぎに、もう1つコロナ禍に対する回答者の意識・態度として注目すべき因子として、第3因子**感染忌避・自粛受容因子**を上げることができる。この因子は、とくに変数H8「新型コロナ・ウイルスの感染拡大を防止するための外出自粛に従うかどうかは、個人の自由だから必ずしも従う必要はない」と強い負の相関をもち、また、逆に、変数H2「新型コロナ・ウイルスの感染は絶対に避けたい」、H5「新型コロナ・ウイルスの感染拡大を防止するための『外出自粛』の呼びかけに、自分は従った」と正の相関を示した。これらの結果から分かるように、この因子は、マイナス側でコロナ感染に対する強い忌避感や行政の自粛要請に対する服従を示す傾向を持っている。この第3因子と、質問群C、D、E、Fとの関係を見てみたい。

表4-8は、この第3因子**感染忌避・自粛受容因子**と質問群C、D、E、Fに属する諸変数項目との相関分析を行った結果を示したものである。ここでは、相関係数が2以上で有意差が<00.1の変数に注目したい。

まず、この第3因子**感染忌避・自粛受容因子**は、D記憶継承に関する態度に関する変数については、D1「阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている」とD5「大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい」に負の相関を示した。つまり、回答者の中で、コロナ禍について感染忌避感が強く自粛要請に対して受容的に行動する傾向をもつ者ほど、被災地は復興していないと考え、また、復興が進んでいない被災地の情報はきちんと明らかにすべきだと考える傾向があることを示した。ここから推測すれば、コロナ感染に対する忌避感が強く自粛を受け入れる傾向のある震災後世代の回答者は、大震災の被災地の復興についても懐疑的で、まだ被災地は震災の傷から癒えていないと考えているのかもしれ

ない。

そして、さらに、この第3因子は、大震災の記憶を伝える効果的手段として、F1「大震災を経験した被災者の直接的な語りかけ」とF5「ノンフィクション映像(テレビ報道、記録映画など)によって伝える」に負の相関を示した。つまり、コロナ感染に対する忌避感が強く自粛を受け入れる傾向のある震災後世代の回答者は、被災者の語りかけや映像メディアによる記憶の継承について効果を

認めない傾向があるといえる。大震災の記憶を伝える効果的手段についての質問群とこの第3因子との関係を見ると、相関の強弱を別とすれば、全般的に、多くの変数で負の相関が認められた。これらの結果から推測すれば、感染忌避感が強く自粛に受容的に従う傾向をもつ回答者は、震災の記憶を語りつつさまざまな手段についてその効果に懐疑的であると考えられるだろう。

表4-7. 相関分析 H因子2×質問群C、D、E、F

C 阪神・淡路大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思いますか。	H因子2	
C1 震災直後の人命救助、消火、応急医療など救命救急活動について	Pearson's r p-value	0.082 0.025
C2 震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について	Pearson's r p-value	0.101 0.006
C3 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて	Pearson's r p-value	0.096 0.009
C4 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程などについて	Pearson's r p-value	0.139 < .001
C5 個人の住宅の被害状況や再建過程などについて	Pearson's r p-value	0.041 0.262
C6 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて	Pearson's r p-value	0.099 0.006
C7 亡くなった人の個人の記録やエピソードなどについて	Pearson's r p-value	0.083 0.023
C8 被災者個人の大震災に対する見解や震災後の生き方などについて	Pearson's r p-value	0.065 0.076
C9 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について	Pearson's r p-value	0.046 0.205
C10 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて	Pearson's r p-value	0.054 0.143

□ p<0.001

D 記憶継承に関する意見に対する賛否	H因子2	
D 1阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている	Pearson's r p-value	0.038 0.303
D2 マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	Pearson's r p-value	0.085 0.02
D3 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい	Pearson's r p-value	0.091 0.012
D4 大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ	Pearson's r p-value	0.076 0.037
D5 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい	Pearson's r p-value	0.123 < .001
D6 大震災で傷ついたり、亡くなった人などの悲しい話はできれば聞きたくない	Pearson's r p-value	0.091 0.012
D7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ	Pearson's r p-value	0.049 0.183
D8 被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている	Pearson's r p-value	0.02 0.581
D9 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある	Pearson's r p-value	0.072 0.048
D10 大震災の被災地にある大学とメディアは、大震災の記憶継承や防災知識・情報の普及について協力すべきだ	Pearson's r p-value	0.095 0.009

□ p<0.001

E 対立する2つの意見のどちらを支持するか	H因子2	
E1 大震災について記憶の継承について (-)被災者の感情や思いの記憶の継承に入力 (+)データに基づく客観的な事実の継承に入力	Pearson's r p-value	0.068 0.063
E2 災害遺構について (-)災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変える (+)象徴的な被災建築物や遺物は辛い記憶を思い起こさせても残す	Pearson's r p-value	0.088 0.016
E3 将来の防災への有用性について (-)防災に役立つ情報や知識を優先して伝える (+)防災に役立つかどうかにかかわらず事実や被災者の記憶は伝える	Pearson's r p-value	0.089 0.015
E4 被災者や犠牲者のエピソードについて (-)被災者の心情に配慮し犠牲者の個人的なエピソードを公表しない (+)辛い記憶でも犠牲者の個人的なエピソードを伝える	Pearson's r p-value	0.133 < .001

□ p<0.001

F 大震災の記憶を伝える手段の効果	H因子2	
F1 大震災を経験した被災者の直接的な語りかけ	Pearson's r p-value	0.026 0.481
F2 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)からの語り継ぎ	Pearson's r p-value	0.054 0.143
F3 友人との会話や議論をとおして語り継ぐ	Pearson's r p-value	0.107 0.003
F4 学校の授業やホームルーム、行事をとおして教える	Pearson's r p-value	0.078 0.033
F5 ノンフィクション映像(テレビ報道、記録映画など)によって伝える	Pearson's r p-value	0.071 0.051
F6 ノンフィクション出版物(新聞・雑誌記事、本、写真集など)で伝える	Pearson's r p-value	0.119 0.001
F7 創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える	Pearson's r p-value	0.122 < .001
F8 SNS、ブログ、ウェブページなどで伝える	Pearson's r p-value	0.096 0.009
F9 博物館や記念館の展示によって伝える	Pearson's r p-value	0.061 0.098
F10 記念碑やモニュメントで伝える	Pearson's r p-value	0.114 0.002
F11 行政、地域団体、宗教施設などの記念行事によって伝える	Pearson's r p-value	0.105 0.004

□ p<0.001

表4-8. 相関分析 H因子3×質問群C、D、E、F

C 阪神・淡路大震災のどんな記憶を語り継ぐ必要があると思いますか。	H因子3	
C1 震災直後の人命救助、消火、応急医療など救命救急活動について	Pearson's r p-value	-0.108 0.003
C2 震災直後の水や食糧の配布などの救援活動について	Pearson's r p-value	-0.152 < .001
C3 避難所や仮設住宅での被災者の生活の苦労や工夫などについて	Pearson's r p-value	-0.105 0.004
C4 道路、港湾施設、水道・電気・ガスなどのインフラ施設の被災状況、復旧の過程などについて	Pearson's r p-value	-0.044 0.229
C5 個人の住宅の被害状況や再建過程などについて	Pearson's r p-value	-0.083 0.024
C6 将来の防災に役に立つような教訓や知恵などについて	Pearson's r p-value	-0.135 < .001
C7 亡くなった人の個人の記録やエピソードなどについて	Pearson's r p-value	-0.124 < .001
C8 被災者個人の震災に対する見解や震災後の生き方などについて	Pearson's r p-value	-0.141 < .001
C9 被災地で活動したボランティアや市民団体の活動や経験について	Pearson's r p-value	-0.148 < .001
C10 意思疎通の障害や異文化の背景をもつ「災害弱者」の経験や困難などについて	Pearson's r p-value	-0.133 < .001

D 記憶継承に関する意見に対する賛否		H因子3
D1 阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている	Pearson's r p-value	-0.236 < .001
D2 マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	Pearson's r p-value	-0.174 < .001
D3 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい	Pearson's r p-value	-0.097 0.008
D4 大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ	Pearson's r p-value	-0.151 < .001
D5 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい	Pearson's r p-value	-0.234 < .001
D6 大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない	Pearson's r p-value	-0.134 < .001
D7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ	Pearson's r p-value	-0.1 0.006
D8 被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている	Pearson's r p-value	-0.104 0.004
D9 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある	Pearson's r p-value	-0.142 < .001
D10 大震災の被災地にある大学とメディアは、大震災の記憶継承や防災知識・情報の普及について協力すべきだ	Pearson's r p-value	-0.102 0.005

相関係数 > ±0.2

E 対立する2つの意見のどちらを支持するか		H因子3
E1 大震災について記憶の継承について (-)被災者の感情や思いの記憶の継承に入力 (+)データに基づく客観的な事実の継承に入力	Pearson's r p-value	-0.043 0.245
E2 災害遺構について (-)災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変える (+)象徴的な被災建築物や遺物は辛い記憶を思い起こさせても残す	Pearson's r p-value	0.151 < .001
E3 将来の防災への有用性について (-)防災に役立つ情報や知識を優先して伝える (+)防災に役立つかどうかにかかわらず事実や被災者の記憶は伝える	Pearson's r p-value	0.136 < .001
E4 被災者や犠牲者のエピソードについて (-)被災者の心情に配慮し犠牲者の個人的なエピソードを公表しない (+)辛い記憶でも犠牲者の個人的なエピソードを伝える	Pearson's r p-value	0.132 < .001

F 大震災の記憶を伝える効果的手段		H因子3
F1 大震災を経験した被災者の直接的な語りかけ	Pearson's r p-value	-0.236 < .001
F2 家族・親類(祖父母、両親、兄弟姉妹、親類の人々)からの語り継ぎ	Pearson's r p-value	-0.174 < .001
F3 友人との会話や議論をとおして語り継ぐ	Pearson's r p-value	-0.097 0.008
F4 学校の授業やホームルーム、行事をとおして教える	Pearson's r p-value	-0.151 < .001
F5 ノンフィクション映像(テレビ報道、記録映画など)によって伝える	Pearson's r p-value	-0.234 < .001
F6 ノンフィクション出版物(新聞・雑誌記事、本、写真集など)で伝える	Pearson's r p-value	-0.134 < .001
F7 創作作品(テレビドラマ、劇映画、文学作品、絵本、コミック本/雑誌など)で伝える	Pearson's r p-value	-0.1 0.006
F8 SNS、ブログ、ウェブページなどで伝える	Pearson's r p-value	-0.104 0.004
F9 博物館や記念館の展示によって伝える	Pearson's r p-value	-0.142 < .001
F10 記念碑やモニュメントで伝える	Pearson's r p-value	-0.102 0.005
F11 行政、地域団体、宗教施設などの記念行事によって伝える	Pearson's r p-value	-0.081 0.028

相関係数 > ±0.2

5. まとめと考察

以上、分析を進めてきた。最後に、これらの分析をとおして得ることができた知見をまとめ、考察を加えたい。

5-1.回答者の属性と大震災の記憶継承意識・態度の特徴

ジェンダーと記憶継承意識については、女性は、男性にくらべて有意に、大震災の犠牲者についての辛い記憶を想起することや復興が遅れている街の現実を直視することに躊躇せず、また、災害遺構の保存にも積極的であることがわかった。これに対して、男性は、女性にくらべて、辛い記憶を想起することや復興が遅れている街の現実を直視する傾向が弱く、震災の記憶の継承についても、将来の防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝えるべきだという考えをより強く支持する傾向を示した。

他方、被災地出身／居住経験と記憶継承意識に関しては、被災地での出生や居住経験の有無は、全体の回答傾向に程度の差を生じさせることはあるが、ほとんどその反応に質的な差はなかった。

5-2.回答者の属性とコロナ禍に対する意識・態度の特徴

つぎに、コロナ禍に対する意識・態度について行った因子分析では、析出された5つの因子を解釈すると「**積極的情報行動因子**」「**被災・被害者意識因子**」「**感染忌避・自粛受容因子**」「**デジタルツール親和因子**」「**コロナ災害自覚因子**」と読み取ることができた。これら5つの因子と回答者の属性の間には、つぎのような関係が認められた。

ジェンダーとの関係については、男性より女性の方に、コロナ感染に対する忌避感情が強く、自粛に対して受容的である傾向が強かった。

被災地出身／居住経験との関係については、阪

神・淡路大震災の被災地が出生地であったり、被災地での居住経験があったり、また、現住地が被災地であったりする回答者は、そうでない回答者より、コロナ感染に対する忌避感情が弱く、また、自粛に対する抵抗感が強い傾向を示し、また、コロナ禍に関する情報に積極的な反応や行動をとる傾向も弱かった。

一方、東日本大震災の揺れを経験した回答者には、コロナ禍に対して被災感情を示し、また、心理的不適応感や経済的困難感を示す傾向が強く現れた。

ようするに、被災地出身者や居住経験者であるからといって、コロナ禍に対して強い警戒感や情報行動をとるわけではなく、むしろ被災地外の回答者にその傾向が強く認められた。

コロナ禍に対する意識・態度との関係では、阪神・淡路大震災の被災地の出身や居住経験の有無が、コロナ禍への強い情報関心・行動、感情反応などを促すだろうという観念は、すくなくとも、大震災を経験していない震災後世代に関しては、当てはまらないことがわかった。むしろ、東日本大震災のような実際の地震体験やジェンダーによる差異の方が、コロナ禍に対する情報関心・行動や感情反応に深く関わっているということを伺うことができたのである。

5-3.コロナ禍に対する意識・態度と大震災の記憶継承に対する意識・態度との関係

最後に、コロナ禍に対する意識・態度に関するこれら5つの因子の中から、**被災・被害者意識因子**と**感染忌避・自粛受容因子**を選び、阪神・淡路大震災の記憶継承にかかる意識・態度との関係进行分析し、つぎのような知見を得ることができた。

被災・被害者意識因子については、コロナ禍によって被災・被害者意識を持つ傾向を示した震災後世代の回答者たちは、非常に緩やかではあるが、大震災で被害を被った地域や人びとの被害や

心情を語り継ぐことに躊躇する傾向を示した。

感染忌避・自粛受容因子については、コロナ感染に対する忌避感が強く自粛を受け入れる傾向のある震災後世代の回答者は、大震災の被災地の復興についても懐疑的で、まだ被災地は震災の傷から癒えていないと考える傾向を示した。

感染忌避感が強く自粛に受容的に従う傾向をもつ回答者は、震災の記憶を語り継ぐさまざまな手段についてその効果に懐疑的な傾向をもつことがわかった。

5-4. 考察

まず、指摘しておく必要があると思われるのは、大震災の記憶継承についての意識・態度において示されたジェンダーによる差異である。女性が震災の辛い記憶を想起することに躊躇せず、災害遺構の保存にも積極的であるのに対して、男性は女性とくらべて、辛い記憶を想起することに躊躇する傾向があり、震災遺構の保存より新しい町並みに作り変えることに積極的で、大震災の記憶の継承についても、防災上の有益性を優先させる傾向が強いことがわかった。この結果は、2019年の調査でもすでに示されていたものであるが、コロナ禍を挟んだ今回の調査でも、同様の結果が示された。とりわけ、震災遺構の保存に対する意見は、男女で相反していることに注目する必要がある。

阪神・淡路大震災の復興過程で、たとえば神戸の壁の保存をめぐる、保存か撤去かをめぐってさまざまな意見の相違があった。この事例だけでなく、震災遺構の保存をめぐる、東日本大震災の遺構の保存をめぐる、今日も多くの意見が交わされている。これらの判断には、行政的な意思決定を必然的に避けることができない場合が多いが、その決定過程において、多くの場合、意思決定の関与できる代表権や権限をめぐるジェンダー間に格差が存在している。阪神・淡路大震災の

災害遺構の保存について、この調査結果で明らかになったようなジェンダー間の質的差異が、災害遺構の保存一般についても、もし存在するならば、災害遺構をめぐる意思決定過程では、ジェンダーに対する十分な配慮がより注意深く行われる必要があるだろう。とりわけ、政治的意思決定の領域で、女性参加に進展が見られない日本の政治社会では、よりいっそうの留意が必要であると思われる。

他方、被災地出身／居住経験と記憶継承意識に関しては、被災地での出生や居住経験の有無は、全体の回答傾向に程度の差を生じさせることはあるが、ほとんどその反応に質的な差はなかった。ここから推論できることを端的に言えば、阪神・淡路大震災の発災後、四半世紀が経った時点で、大震災の記憶継承に対する意識や態度について、被災地出身であるかないかによる明確な差は、減少しつつあるのかもしれない。

この事実は、災害記憶の継承がたんに被災者や被災地とその周辺にのみ特化した課題とするだけでは、不十分であることを示唆しているように思える。

また、同様に被災地出身者や居住経験者であるからといって、コロナ禍に対して強い警戒感や情報行動をとるわけではなく、コロナ禍に対する意識・態度についても、被災地出身者や居住経験者であれば、コロナ禍への強い情報関心・行動、感情反応などが現れるだろうという推測は、すくなくとも、大震災を経験していない震災後世代に関しては、当てはまらないことがわかった。

他方、この調査が明らかにした、コロナウイルスへの感染に対して強い忌避感をもつ回答者が震災の記憶を語り継ぐさまざまな手段についてその効果に懐疑的であるという知見をみれば、大震災の記憶継承の取り組みに際して、その手段や方法についてよりいっそうの工夫と内容の充実が要求されていると思われる。

デュルケーム社会学の流れを受け継ぎ、集合的記憶について先見性をもつ論考を著したユダヤ系フランス人の社会学者、モーリス・アルヴァックスは、その著作『集合的記憶』の中で、人間社会における集合的記憶には階層性があることを指摘した。⁷個人的記憶、集団的記憶、文化的記憶の3つの層によって集合的記憶は形成されると述べ、文化的記憶の重要性を指摘した。文化的記憶とは、媒体などによって伝達・伝承された体験者の経験、世代を超えて受け継がれる記憶のことである。被災地で行われている防災教育の中で語り継がれてきた被災当事者の記憶、家族の被災記憶、地域社会の被災記憶などは、アルヴァックスのいう個人的記憶や集団的記憶に当たるものである。これらの記憶を集合的記憶として共有するために、被災者や被災地を超えて記憶を語り継ぐ試みがますます必要になるに違いない。発災30年を迎えようとしている阪神・淡路大震災の記憶継承の営みの課題をここに見出すことができるに違いない。

参考文献

- 山中速人、照本清峰、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する震災後世代の意識と態度～調査報告(基礎編)～」『総合政策研究』第61号、pp.47-69
- 山中速人、照本清峰、津田睦美、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災後世代の震災記憶継承とコロナ禍に関する意識と態度：2020年度調査報告(基礎編)」『総合政策研究』第63号、pp.69-95
- モーリス・アルヴァックス、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年

7 モーリス・アルヴァックス、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年